

# HELLO

ハローインタビュー



## シンガポール教育省語学センター(MOELC) 日本語科主任

### サムエル・ヨンさんインタビュー

～日本語の細部に宿る美しさと論理に魅せられて～

1978年に設立されたシンガポール教育省語学センター(MOELC)。ここはシンガポールのトップ10%の優秀な中高生たちが集まり、日・独・仏・西・マレー・インドネシア・アラビアなどの外国語を学ぶ国立の語学センターです。このMOELCで日本語科の主任を務めるサムエルさんにお話を伺いました。

(実施日:2026年5月9日)

#### 聞き手

南十字星編集委員 編集部  
日本人学校小学部チャンギ校教諭  
吉田まりか、竹下雄貴、大原千栄子

#### 原点は「のり」に書かれたかな文字—その不思議な魅力に導かれ

— 日本語に興味を持たれたきっかけを教えてください。

**サムエルさん** 日本語との出会いは、幼稚園の頃にまで遡ります。当時、幼稚園の工作の授業で日本製の「のり」を使っていて、そこに書かれていた日本語の文字を目にしたことがきっかけです。読める中国語の漢字の間に、見たこともない奇妙な形をした文字(仮名)が挟まれていることに不思議な魅力を感じ、「いつか読めるようになりたいな」と漠然と思ったのを今でも覚えています。

## SJ60特別インタビュー



SINGAPORE - JAPAN  
DIPLOMATIC RELATIONS  
1966 - 2026

当時は日本の経済力が高く、シンガポールは日本文化ブームの真っ只中でした。山口百恵さんのドラマ『赤いシリーズ』や紅白歌合戦がテレビを彩る—そんな時代だったので、日本に対する漠然とした憧れもっていました。そんな中で最初に覚えたカタカナは、なぜか一番目についていた「ス」でした。それから、ひらがなの「の」は日本のドラマのタイトルなどによく使われていて、中国語の「の(的)」に相当することもあってすごく印象に残っていました。



笑顔が絶えない  
サムエルさん

とにかく日本語の文章を眺めるのが好きで、小6の時に日本語の学習書を買って、独学を開始しました。その後、中学進学後にMOELCで勉強する機会を得て本格的に勉強を始め、高校1年の時には数週間の研修旅行で初めて日本へ行きました。高校卒業後、1年間の兵役を経て、1998年に奨学金をもらって渡日しました。

#### 理系脳で挑んだ「国語学」と強烈な恩師との出会い

— 日本での学生生活や、専攻された学問について教えてください。

**サムエルさん** 渡日して最初の1年間は大阪大学(当時の大阪外国語大学)で日本語研修を受け、その後、東京大学へ進学して国語学を専攻し、大学院まで進んで修士号を取得しました。私は高校までずっと理系だったのですが、国語学は日本語を分析的に考える分野なので、案外自分の性に合っていました。



学生時代のサムエルさん

大学時代の思い出は、文法が専門だった強烈な指導教官の教授です。日本語の文法についての高度な話を関西弁で延々と語り続け、授業が時間通りに終わることはまずありませんでした。当初は1学期だけで十分だと思っていましたが、次の学期に別の授業を取ろうとしたところ、その先生から直接「おれの授業を受けろ」と電話がかかってきまして…。結局、大学院を卒業するまで5年半もその先生の授業を受け続けました。大変ではありましたが、極めて濃密な内容の授業のおかげで、言語に対するセンスや分析的に考える力が身につき、今の仕事に大いに役立っています。今でもその先生に深く感謝しています。

大阪では友人のホストファミリーのお父さんが喋るきれいな関西弁を聞いて、「美しい言葉なんだな」と感心したことも印象に残っています。



横浜の赤レンガ倉庫にて



6年間通った東大の赤門で



横浜にて



東大キャンパスの銀杏並木



日本中を旅して回った学生時代



レインボーブリッジをバックに

## 五感を揺さぶられた沖縄

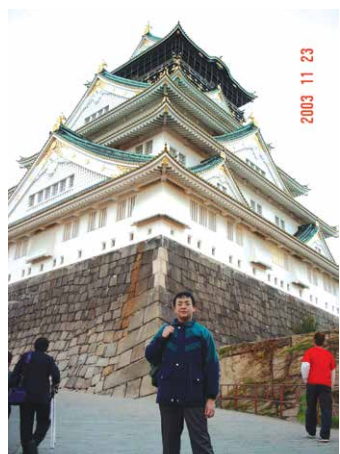
一 日本滞在中に訪れた場所で、特に印象深かったエピソードはありますか？

**サムエルさん** 一番印象に残っているのは沖縄です。それまでは北海道から九州までをすべて「制覇」していたので、初めて「離島」にも足を伸ばしてみたのですが、本土とは文化も街の雰囲気も全く違い、独特の琉球文化や歴史もあって、まるで日本語の通じる外国に行ったような強い衝撃を受けました。

これまで見たことのないほど広大な紺碧の海を初めて目にした時は、文字通り息を呑むほどの衝撃を受け、いつまでも眺めていたことを今でも鮮明に覚えています。また、現地の人もすごく温かくて親切でした。中でも一番心に残っているのはあるタクシーの運転手さんで、最初は1か所だけ行くつもりで乗ったのですが、運転手さんがとても親切で「おすすめのおもしろい所に連れて行ってあげる」といろいろ案内してくれました。



京都・嵐山にて



大阪城にて

最後にお金を心配したのですが、大したお金も払わなくてよくて、その優しさと温かさにとっても感激しました。

## 国家の日本語教育を牽引する職務とライフワーク

ー シンガポールに帰国されてからの歩みと、現在のお仕事について教えてください。

**サムエルさん** 大学院を卒業後、残っていた兵役を終えてから、NIE(教師養成課程)を経てMOELCの日本語教師として勤務し、昨年日本語科の主任になりました。途教師なので授業を行うことが基本ですが、日本語科主任として、いろいろな事務的な仕事もこなさなければなりません。先生たちや校長からの様々な相談への対応、試験問題の作成やチェック、行事の企画や準備、授業観察、新人指導、外部団体とのやり取りなど、業務は多岐にわたります。

また、私には翻訳者・通訳者としての顔もあります。日本で翻訳のおもしろさに目覚め、翻訳・通訳を独学で学びました。そして、大学で日英翻訳のアルバイト、教会で中日通訳のボランティアをしました。今でも多忙な本職の傍ら、大切なライフワークとして教会で翻訳と通訳に自主的にボランティアで携わっています。

仕事において細部にこだわる姿勢や、常に相手の立場や気持ちを考えて行動することは、日本ででの生活を通して身についたものだと思います。

## 日本の作品に親しむプライベートタイム

ー 大変お仕事が忙しそうですが、お休みの日などはどのように過ごしていらっしゃいますか。

**サムエルさん** 休日も授業準備や学生の宿題の添削などに費やすことが多く、結果的に仕事中心の生活になりがちですが、余裕があるときはカフェでのんびり読書をしたり、ドラマや映画を観たりして過ごしています。

私自身、職場を離れると日常的に日本語が話されている環境ではないため、日本語力を維持することの難しさを感じています。だからこそ、宮部みゆきさんなどの推理小説やノンフィクションを読んだり、Netflixの日本ドラマやYahoo! JAPANのニュース記事などを見たりして、普段から日本語でインプットすることを心がけています。

## シンガポールの日本語教育の現状

ー シンガポールにおける日本語教育の現状について教えてください。

**サムエルさん** シンガポール人は英語と自分の民族語ができるので、外国語に対する関心度が日本ほど高くなく、語学学校の広告もまずめったに見かけません。でも自分が日常的に接している学習者の様子を見る限り、韓国語という強力なライバルがあるとはいえ、日本語は依然として根強い人気があります。アニメや漫画などのポップカルチャーがきっかけで日本語を始め



インタビューの様子

る初級の学習者は非常に多いですが、ポップカルチャー以上の動機を見つけなければ、長く続かないのも事実です。初級の学習者は非常に多い一方、中・上級まで進む学習者は限られています。

## 日本人会会員へのメッセージ

ー 最後に、シンガポールで暮らす日本人会会員へメッセージをお願いします。

**サムエルさん** せっかく海外にいるのですから、日本人のコミュニティ内だけで完結せず、ぜひ積極的にシンガポール人社会に関わってほしいと思います。シンガポールに住んでいながら、いつまでも日本の物しか買わず、日本人同士の交流にとどまり、シンガポールの言葉もほとんど分からないというのは、ちょっともったいないなと感じることがあります。

シンガポールは複数の言語の中で人々がアイデンティティを形成しているローカルな社会です。異文化に身を置くことは確かに大変な面もありますが、コミュニティの外へ一歩踏み出し、異なる文化の中で得られるものは、非常に大きく、人生の大きな糧になるはずです。

文責・画像：南十字星編集委員 編集部  
日本人学校小学部チャンギ校教諭  
吉田まりか、竹下雄貴、大原千栄子



インタビューを終えて～(左から)チャンギ校吉田まりか教諭、サムエル・ヨンさん、大原千栄子教諭、竹下雄貴教諭

## インタビュー後記

終始穏やかな語り口と、柔和で人懐っこい笑顔が印象的なサムエルさん。ひとたび「日本語」の話題になると、その瞳の奥に、かつて文字の不思議に胸を躍らせた少年のような澄んだ好奇心のきらめきが宿るのを感じました。一つの言語を深く愛し、その構造を理知的に紐解きながら、現地の人々の温もりに素直に心を震わせる。そんな知性と人間味に溢れたサムエルさんとの対話はあまりにも心地よく、私たちは時を忘れて引き込まれてしまいました。何気なく暮らしているこの多言語の街には、まだ見ぬ奥深くで豊かな世界が広がっています。閉じがちな居心地の良さから更なる一歩を踏み出して、この街の呼吸をより深く肌で感じてみたい——そう思わせてくれた貴重な出会いとなりました。

編集部 吉田まりか